

ともだちになった フランシスコとオオカミ



文 ロベルタ・グラッファーニ 絵 パトリシア・ゴンチ

訳 わきた・あきこ

ともだちになった フランシスコとオオカミ

文 ロベルタ・グラッファニー 絵 パトリシア・コンテ

訳 わきた・あきこ

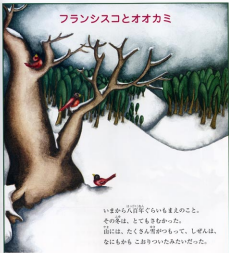


はじめに

ずっとむかしのある冬のこと。
イタリヤのグッピオという町で、
ほんとうにあった
おそろしいオオカミと、
とてもやさしいフランシスコのものがたり。
このお話は、
せかいじゅうでよく知られているけれど、
日本ではどうかな？



フランシスコとオオカミ



いまから八百年ぐらいいまへのこと。
その冬は、とてもきむかついた。
山には、たくさん雪がつもって、しぜんは、
なにもかも こおりついたみたいだった。



動物たちは、食べものが見つからないので、
 山を出て、谷へくだり、人びとがすみ処にも
 近づいていった。シカも、キツネも、クマも、
 オオカミもいた。小鳥も、カラスも、タカもいた。
 山にすみすべての動物がうえて、死にそうだったのだ。



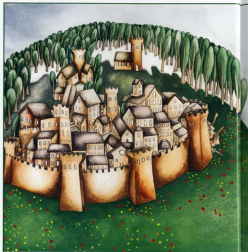
グッピオは、イタリヤのまんなかあたり、
海のはしにある小さな町だった。冬はきびしかった。
野生の動物もひっして食べものをさがさなければならない。
夜がふけると、動物たちは、人の里まで近づいて、
なにか見つけると、きつととってにげるのだった。
町の人がとは、小さな動物たちのために、なにかかにか
よういして、ドアの外におき、知らんぷりをして
とらせてやったり、小鳥たちには、パンのかけらを
ばらまいてやったりした。シカには、
あぶらみの肉きれをなげてやることもあった。
このへんの冬山では、夜、オオカミのうなりごえが
聞こえることはふつうだったが、その冬、
オオカミたちもうえていたのだ。むれになって、
町の人がかっているヒツジをおそい、一ひき、二ひき、
三ひき——と、ひきさいた。



オオカミたちは、ほんとうは おくびょうなので、
おなかをすかせていても、^人の^家まで
悪い^{こと}を^しな^かった。
ところが、ある^ばん、^一び^きが^町の^なか^まで^入って^きた。
うなりながら、ぐるぐると、^町の^なか^をまわり、
人^びと^をと^ても^こわ^がら^せて、^出て^いった。そのときから、
このけものは、まい^{ばん}あら^われる^よう^にな^った^のだ。



^山を^出ると、ヒ^ツジ^をお^そって^むな^はり^食い、
と^てて^食べ^られ^るな^ら、と、^人に^まで^近づ^いて^きた。
ダ^ビオ^の人^たちは ^こわ^くて^たま^らな^い。男^たちは、
^町を^出る^とき、たい^まつ^をと^もして、^武器^をも^った。
女^たちは、^家に^とじ^こも^り、こ^ども^たち^も、
もう^外に^出て^あそ^ばう^とは^しな^くな^った。



ゆっくりと、さむいさむい雪がふった。
 春がやってきた。町の外には、花ばながさきみだれた。
 森はこいみどりにつつまれ、小鳥たちの歌にあちた。
 しぜんは、どこちかしこも、いきいきとしている。
 けれど、グッピオでは、
 あのオオカミがまだ人びとをおびやかしてつづけていた。



そのころ、フランチスコがグッピオの町をとおりがかった。
人びとはみんな、フランチスコのことはよく知っていて、
だいすきだった。やせっぽちのからだに、ふくみのような
ほろをきた、この修道士（かみさまにつかえる人）を。
フランチスコはなにもしがらず、かみさまや、
イエスさまのとてもしあさい話を聞かせてくれるのだった。
やつれて、びょうにんのような顔だけど、
それでもとても明るかった。かみさまにつかえる人の、
しあわせいっぱい、かがやいているのだ。
フランチスコは、町の人たちがオオカミにおどかさね、
こわがっているのを見て、けっしんした。

「わたしが、オオカミのところへいって、試してみよう」と。
人びとは、びっくりして、ひきとめようとした。
「オオカミは、こわいけものですよ。あなたはころされちゃう。」
でも、フランチスコは、そのまま町を出ていき、
けものがかくれていそくに思えるところを歩きまわった。
うしろから、なかまの修道士たちがついていき、
そのずっとうしろから、
町の人たちがついていった。



すると、そこへ、いきなりオオカミが、ものかげから走りでてきた。武器などにもたないこの人たちの前に。フランスコは、オオカミに近づきながら、すすりのしるしをした。「おいで、きょうだいオオカミくん。わたしはきみのためのんだ。イエスキリストのために。わたしにも、だれにも、わるいことはしないようにって。」

しんじられないことがおきた。オオカミはたちどまり、おそろしい目をとじて。フランスコの足もとに、おとなしくよこたわった。フランスコは、やさしい目を、このおそろしいけものに、じっとそそいで、話をにつづけた。

「きょうだいオオカミくん、きみはとてもひどいことをしたね。人や動物をおそって、むさぼり食ったじゃないか。だから、みんな、きみの敵になってしまった。かみさまがおつくりになったものに、わるいことをしたんだよ。どうぼうだったし、ころしやだった。はつを受けてあたりまえだよね。」



「でも、きょうだいオオカミくん、わたしはいま、
きみと人びととのあいだに平和のやくそくを
むすばせたいんだよ。森の人たちが、きみをゆるして、
もうおいかけたりしないように、ね。」このことばを
オオカミは、ぜんぶちゃんとわかって、
フランシスコがいうとおりにする。と、たいどでしめた。



フランシスコは、つづけた。
「だからね、オオカミくん、平和をやくそくするしるしに、
グッピーの人たちは、きみに生きるための食べものを
あたえてくれるよ。きみがおなかをすかせて
かなしがったりしないようにね。おなかがすいたから、
きみはぬすんだり、ころしたりしたんだと、
わたしはよくわかっているから。
そして、きみ、オオカミくん、これでもう、人々
かちくにおるいことをしないと、やくそくするかい？」
オオカミは、やくそくのしるしに、うなずいた。
フランシスコはまたいった。「では、きょうだい、
きみのやくそくをしんじさせておくれ。」そして、
フランシスコは手をさしだした。すると、オオカミは
右足を上げて、フランシスコの手にかきねた。
フランシスコは、いった。「おいで、きょうだいよ、
かみきまにちかって、
このやくそくをしっかりとしようね。」

オオカミは、すなおに、おとなしく、あの
武闘などもたない人のあとから、町の広場までついていった。
このニュースは道から道へ、家から家へ、ひろまった。
みんな、男も女も、おとなも子どもも、わかものも年よりも、
あのおそろしいけものが、まるでヒジブツのように、
「小さな修道士」についていくのを見ようと、走りだした。
広場のまんなかで、フランシスコは人びとに話した。
「このオオカミは、これまで きけんをわるものだったけど、
もうきけんじゃないし、かみさまのおこころをいためることも
しないよ。かみさまのおこころをいためることは、
わたしたちのたましいが ほろびることにもなる。
だから、みんないい人になってください。
あなたたちのなかにある やさしさをこみさないで、かみさまは
すべてのきけんから あなたたちをまもってくださいますよ。」
わきにいるオオカミをなでながら、フランシスコはつづけた。
「きょうだいみなさん、聞いてください。
わたしたちのきょうだいオオカミは、やくそくしました。
もしあなたが、毎日、食べものをあたえるなら、
これからはもう、あなたたちにわるいことはしない、と。」
人びとは、みんな声をそろえていった。
「やくそくしますよ、フランシスコ。
毎日、きょうだいオオカミをやしなう、と。」

